

コア娘アーマードダービー

からす the six hands

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ラインアークにて水没したオツツダルヴァ

本来であればそのままORCAに合流するはずだったが、目を覚ますと別の世界へと転移していた

ガールズラブタグは一応

目次

水没、 水没	新報、 異能	暴露、 伸長	依頼、 契約	群衆、 選択	境界、 交流	出走、 失望	編入、 畏怖	同胞、 遭遇	宿舍、 親交	証明、 開戦	疾走、 判明	水没、 浮上
61	56	51	45	40	34	29	24	19	14	9	4	1

水没、浮上

諸君、初見となる。私はランク一位、オツツダルヴァだ。今は協力相手のホワイトグリンントにメインブースターを撃ち抜いてもらって水没している最中だ。

「くっ、駄目だ…沈んで行く…!」

我ながら名演技だ。これならば相方のリンクスにも気づかれないままORCAに合流できるだろう。

ここまでは計画通り。あとはメルツエルの操艦する潜水艦に回収されれば計画完了だ。

しかし、想像以上に威力が高かった。おかげで今にも気を失いそうだ。どうせ操縦できないし、少し眠るくらいならば良いか。そして私は、回収をメルツエルにまかせることにして目を閉じた。

目を覚ますと、なんか体が軽かった。そして、体が水浸しだった。慌てて体を起こすと前世と比べて何か視点が低い。しかも周囲を見渡して辺り一面に広がるのは森である。自分が今の今まで浸かっていたのはその森の中にある浅い湖…というか水たまりである。水自体は澄んでいて綺麗だ。

だがしかし、そんなことはどうでもいい。何故地上にここまで綺麗で清浄な空気が残っているのだ。地表というのはゴジマで汚染し尽くされ地表の殆どが砂漠化したのではなかったのか。

そして何故私はそんなところにいるのだ。

本来ならメルツエルに回収されて潜水艦の中で目を覚ます算段ではなかったのか。

ランク1位の私の思考を用いても理解に足りない。ひとまず水に浸かったまま思案するわけにはいかないので立ち上がると視点が明確に低かった。

まさかと思いい水面に映る自分の顔を覗く。

「はっ…」

そこには、自分の顔ではなく少々キツめ印象を覚える顔をした美少女が映っていた。髪の色は薄い青で瞳はクリアブルーとも言うべき

透明感ある色をしている。

いやいやいやいや、なんだこれ。まるでファルスとかそんなレベルではないぞ。しかも、なによりも特筆すべきはその頭の上に乗る謎の長い動物の耳だ。

馬とか兎とか、そんな類の長い耳がそこには生えている。まさかと思つて尾骨の部分に触ると、そこにはやはり尻尾が生えていた。

サラサラとした長い尻尾。馬…に類するものだろうか。つまり私は水没して寝て起きたら馬のような女になっていたということか。

……。

「納得できるかあー！」

つい口に出してしまふ。

数分待つて自らを落ち着かせる。とりあえずの脳の整理は済んだ。ひとまず今はこの世界の概要についての把握をしておかなくてはならない。

まずわかつていることとして、この世界にはコジマ技術は存在しない。存在していたならこんな綺麗な空気も水もおそらくない。つまり、世界がそもそもまるつきり別ということだ。信じづらいが実際際こうなっているという事実がある。信じないわけにはいかないだろう。次に、確証はないがこの世界には獣人とかそんな感じの存在がいると思われる。一般的か差別対象かは別としても私がついている以上ありえない話ではなさそうだ。

そして最後にこの世界の技術水準がなによりも重要だ。文献で見た中世のような世界であればたまったものではない。だが、これが我々の生きていた世界より少し前の世界くらいの技術水準であるならば、常識から外れたようなことは少なくて済みそうだ。

考察はこの程度にして、ひとまずは森を抜けることにするか、そう思い立ち上がると急に風が吹いた。そして、私の体を震わせる。それもそのはずで今の私は水に濡れた体に濡れた衣服を纏っているのだからな。

衣服？

今まで疑問を抱かなかつたがなぜ私は自分のサイズにあつた衣服

を身に着けているんだ？

そう思つて自分の体を見返すとオーバーサイズな白の半袖とホットパンツと呼ばれるような服を身に着けていた。ホットパンツの下には白の下着、ブラに該当するものは胸の薄さからついていない。そして、当たり前だが前世で長いこと連れ添った相棒はどこかへと行つてしまっている。

兎にも角にも人里に出ないことには始まらないと森を抜けるために駆け出す。

すると、その速度が凄まじかった。さながらV・O・Bを使ったときのような異次元の移動速度。周囲の木々が一瞬のうちに自身の後方へと抜けていく。

慌てて立ち止まる。

後ろを振り返るとはるか遠くの方に先程まで自分がいたであろう水たまりが見える。軽く走っただけのような気がしたが前の私の体とは根本的に作りが違うのだろう。走るときはセーブをしてからにしないで。

力の制御が未だうまくできないため、歩くことにした。

歩き始めてから約20分。いきなり視界が開けた。そこは坂になつていた。

そして、坂を下つて少しした先には街が見える。

一先ずはそこを目標に据えて歩を進め始めた。

疾走、判明

一先ず坂を下って町中に出たわけだが、私の心配していたような技術レベルではないようだ。

ビルなどが乱立している都会のような街だ。インフラ類も整備されている上に人で溢れている。旧ピースシティや旧コロニーシングが全盛期だったならばこんな町並みだったのだろうか。そういえば若年の頃に訪れたどこかのコロニーもこのくらい発展していたような気がする。

とりあえず勝手の知らぬ街、国、世界についたときにすべきことはまず情報収集だ。

幸いなことに今、私の目の前には古本屋がある。古本屋であれば立ち読みも可能な場合が多い。この世界の通貨を持っていない私にはうってつけの情報収集の場だ。まあ可能ならば図書館などが好ましいが、職員などに話しかけられた場合にボロが出かねない。というわけで早速中に入る。

店の中は全体的に綺麗に整えられていてホコリが積もっていたりも見たところなさそうだ。店主はというとカウンターにもいない。こんな無防備で盗まれないのかね。

あたりを見渡すと入り口のすぐ脇のマガジンラックに比較的新しい雑誌が置かれていた。

そのうちの一つを手取る。タイトルは有澤重工なんかで使われている文字、日本語：だったか。それに類する文字で書かれている。私はランク一位だから当然多言語を習得している。無論有澤周辺も例外ではない。そのため、読める。読めるのだが、その内容がどうにも理解できない。

”新進気鋭のウマ娘特集！同世代最強は誰だ！”

ウマ娘：ウマ娘ってなんだ。

馬は馬だろう。なんでカタカナなんだ。そう思ったときにふとある考えがよぎった。

もしかして、私が今成っている馬の特徴を持つ女のことを総じてウ

マ娘という種族として扱っているのではないか：？と。さらに古来より馬という存在がすべてウマ娘だったならば、差別的観点から馬という漢字を充てていないことも納得できる。となれば牡馬はどうなるのだと聞きたいが、もしかしたら牡馬は存在せず、ウマ娘しかないという前提のほうが筋が通りそうだ。

そして、この雑誌の世代最強という謳い文句から推測するにおそらくだがこのウマ娘という連中：まあ今は私もそうになっているのだが、何かしらの競いごとをするのだろう。そしてこんなに大々的に民衆の見えるところにあるということは戦争関連ではない、ということだ。おそらくだが人々が空に住み始めたあたりから失われたギャンブルの一つ、競馬というやつだろう。

人の形を取っていることからどちらかといえば陸上競技に近いのだろうか。だが、そのどれもがクレイドル体制が実現されてからの人間には見ることの叶わないものだ。

パックスエコノミカが施行されていた時期にはあったのだろうか、私にそんなものへの興味はなかった。そんなことを思いながら雑誌のページをめくっていると、5人の少女の写真が目に入ってきた。それぞれに、スペシャルウィーク、エルコンドルパサー、グラスワンダー、キングヘイロー、セイウンスカイと銘打ってある。

これはなんだ：？コイツ等の名前なのか：？それとも二つ名なのか？どちらにしても奇怪極まる。人の名前というよりかはどちらかといえばネクストの名前と言われたほうがしっくりくるような名前ばかりだ。

もし名乗るのならば私もステイシスのほうが良いのだろうか。見た目も少女だしオツツダルヴァでは流石に変な気もする。この世界では私はステイシスだ。アンサンングという手もあるが、意味合いがどちらかといえばステイシスのほうがレースに出るやつらしい。アンサンングでは影の功労者になってしまうからな。

それにこの見た目の色味からしてもどちらかといえばステイシスのほうが適切だ。

それにしても通貨がわからないな。値札にはUというものがつい

ている。私の知る限りではUの頭文字から始まる通貨はない。ユーロか？いや、あれは頭文字がEだしヨーロッパ圏の通貨だった気がする。コインで払えればいいのだがあれは基本的にAC系の部品を買うのに使うものだからな…。そういえば私のクレジットカードはどこへ行ったのだろうか。私の総資産が入っているから無くしたのはかなり痛手だぞ。

と一応ホットパンツのポケットを漁ると左ポケットから何かしらの紙が出てきた。

「なんだ…？これ。」

水に濡れてびしょびしょになったそれは見たところ住民票のコピーのようだった。

「なんでこんなものが…？」

そこには大量の私に関しての個人情報に記されていた。そして、名前の部分にステイシス、とそう刻まれていた。やはり私の名前はステイシスか。それを再び畳んでポケットにしまう。なぜこんなものがポケットに入っていたかはわからないが、いつか必要になるときが来るかもしれないので大事にしておこう。

その後20分ほどいろいろな雑誌や新聞などを漁ってこの世界の大体のことがわかった。まず、ウマ娘以外の獣人に属する存在はいない。なぜウマ娘だけなのかは疑問が残るところだがその辺は私にはわからないところなのだろう。次にこの世界ではトレセンというものがああり、ウマ娘はそこに通ってレースにむけて体を鍛えるらしい。私の今の年齢は先程の住民票と新聞などの発行日から照らし合わせて考えると16くらいだろう。

つまり今からトレセンに通うことも可能、ということになる。ならば今のところの私の目標はトレセンへの入学、ということになるか。試験などがあっても私の頭には大体の教養が入っている。問題なく入れるだろう。足なんかも先程の一瞬の疾走でわかったがかなり早い部類だろう。まあ、ウマ娘の基準というものがわからない以上は驕らずに行くのが定石か。

問題なのは今の時期だろうか。気温からして春先なのはなんと

くわかるのだが試験期間などはもう過ぎていそうだ。賄賂などで編入するしかないか…？

そんなことを思いながら用済みとなった古本屋を後にして外に出る。外はすでに日が傾き始めている。そういえば今日の寝所とする場所を決めていなかった。金もないからどこかに泊まることもできない。

生まれ変わって早々体を売る羽目にはなりたくないが本当にどうしようもなくなったらそうするしかないか。それまでは誰か泊めてもらえる様な人を探すことに専念すべきだろうな。さすがに少し暖かくなってきたとはいえ装備もないまま野宿するのは危険が伴う。せめて寝袋程度はほしいところだ。

そう思案しながら歩いていると後ろの方から何かの駆動音と女性の叫び声が聞こえてきた。

「ひったくりよ！誰か捕まえて！」

その声が聞こえると同時に立ち止まった私のすぐ左隣を女物のバックを右手に持った男がスクーターに乗って走り抜けていった。

まあ、誰かが対処するだろう。そう思ったがある考えが浮かんできた。

これは私の実力を測れるいい機会なのではないか？相手は人類の叡智の結晶とも言えるべき車両だ。それに対してウマ娘となった私の止める力、追いかける脚力、それら諸々を一度にわかるといえるのはかなり魅力的だな。さらに助ければ謝礼ももらえるかもしれないし運が良ければ家に寝させてもらえるかもしれない。

ランク一位の思考回路を使うことでこの思考の時間リアル時間にしてわずかコンマ以下。

条件を総合して、これはやるしかないな、そう思った私は身をかがめて正面を見据える。

目標は今にも逃げようとするスクーター。

足を踏み出そうとしたとき、体中をネクストとリンクしたときのような感覚が襲う。高揚感のような、熱のような、なんとも言えない感覚だ。

そして見据える視界にあの慣れた画面を空目する。
そして一つ眩く。

「戦闘開始。ステイシス、出る。」

証明、開戦

今日この私シンボリルドルフは、トレーナーくんには渾身のダジャレを披露するための本を買いに本屋へと赴いた。なんでもお慕いする先生のダジャレ全集が出たというのだ。これを逃す手はない。そして迅速果敢な行動の成果か売り切れる前に購入することができた。

目的の買い物を終え、ついでにショッピングモールで何か見ていこうかと歩道を歩いていると、車道を挟んだ向かい側。対面の歩道をスクーターが駆け抜けていくのが視界に入った。

ルール違反、これを取り締まらないわけにはいかないと静止をかけたように思ったとき悲鳴が聞こえてきた。

「ひったくりよ！誰か捕まえて！」

そちらを見ると、対面の歩道、自身よりも後方でスクーターの男を指差しながら息を上げている妙齢の女性が視界に入った。悪逆無道。なおさら逃すわけにはいなくなった。あの程度の速度であれば今から追いかけても間に合う。そう考えて足に力をかけようとした時、スクーターを追う青いウマ娘が目に入った。

見たことがない。トレセンの所属ではないのだろう。だが、その脚力はまさしく驚異的だった。一步一步が力強く、地面を砕かんとするほどの踏み込み。それでいながらしなやかで、シニア級のウマ娘を思わせるような迅速な足運び。その少女の走りは気がつけば私に追いかけることを放棄させていた。そして、恥ずかしながら魅入ってしまった。その美しい走りは、オグリキャップなどの伝説を想起させる。

そして彼女はみるみるうちにスクーターに追いつき、追い越した。そこからの行動がまた私を驚愕させた。

片足を軸とした180°の急反転。並のウマ娘、それどころか私ですら足が故障しかけないそれを彼女はとも容易く、それどころかさも当然と言った様子で行い、右腕でスクーターを受け止めた。

ただただ魅入られてしまった。彼女には才能がある。その才能、野放しにしてなるものか。私はひったくり犯の処遇などすっかりと忘

れて彼女の元へと駆け出していた。

駆け出す。

ただ早く、ただ強く眼前の犯人などは二の次にひた走る。ネクストに乗った時のようなスピードを肌で感じながら一歩また一歩と距離を縮めていく。そして追い越し、左足を地面につけてクイックターンの要領で真後ろを向く。回る勢いを利用して右腕を前に突き出しスクーターのライト部分を掴む。

ウマ娘のパワーというのは存外強いもので、少し力をかけるだけでスクーターはタイヤを空回しするだけの機械となった。ひたたくり犯はどうしているかというところと捕まったことに狼狽えあたまをたしている。

「ふっ、こんなものか。」

誰かが警察を呼んだのだろう。遠くからサイレンの音が聞こえてくる。呆然としているひたたくり犯からバッグを奪い、悲鳴を上げた女性の元へと向かう。

女性は、すでに私を囲うギャラリーの一人になっていた。

「これで構わんか。」

「ええ、ありがとうございます。謝礼と言ってはなんですが…。」

そう言っただけ女性は数枚の札を渡してきた。

「ああ、十分だ。」

「本当にありがとうございます…。この御恩は後ほど必ずお返しいたします。」

「気にするな。気まぐれだ。」

そう言っただけ立ち去る。これでこの世界の通貨も微小ながら手に入る事ができた。数字を見るにどうやら一万だろう。それが五枚。五万も有れば何か見つかるまでの食い扶持の確保や寝所くらいなら用意できそう。残念なことに話ぶりからしてこの女性の家には泊まれないさそうだからこのあとは最寄りのホテルでも探しにいくとするか。

ギャラリーに囲まれるのはあまりいい気がしないので速やかに離

れる。

それにしても一日歩き回ったからいい加減喉が乾いたな……。馬の体は瞬発力に優れるが燃費が悪いのが欠点か。

隠れるようにしてギャラリーをかき分け、すぐさま離れる。水分補給にどこかのカフェにでも入るか。そう思い喧騒を後ろに聞きながら歩いていると、誰かついてきている気配を感じた。殺気はない。憧憬でもない。より高潔で若い気配だ。リンクス時代に幾度となく浴びた気配どもとはまるきり違う。

だが、怪しいことに変わりはない。一定の距離を保ちながら歩いていると自動販売機が目に入った。ブラフと確認を兼ねてそこで何か買うことにするか。何もなければただ飲み物を買える。何かあってもこちら有利でことを始められる。舞台とするには悪くないだろう。

自販機の目の前に立ち、先ほどもらった札を入れる。そして気づかれないように横目で追跡者を見ると、それは少女だった。茶色寄りな髪の毛をした少女。耳が生えていることから私と同じウマ娘だろうか。

彼女は着々と近づいてきている。そして二人が交差するとき、自販機から札が戻された。

なぜだ。

訳もわからずもう一度入れるがまた戻されてしまう。

「自販機には万札は入らないよ。君。」

「む……。」

悪戦苦闘していると知らぬ間に隣に立っていたウマ娘に話しかけられた。近くで見ればわかるが随分と端正な顔つきをしている。聡明そうな顔だ。そして、万札が入らないと言われて対応する通貨を見ると確かに小銭とこれより小さい紙幣しか入らないようだ。

「一本奢らせてはくれないかな?。」

「動機がわからん。」

「君と少し話がしてみたくてね。」

「…構わん。」

リンクスとして油断は禁物、それは前提条件だ。だがこの少女から

は殺気と呼べるものは到底感じられない。ならば少し話すくらいならば問題ないか、とそう考えてしまった。私の了承を聞いた少女は2本、ペットボトルの紅茶を買った。そして一本を私に手渡す。

「私はシンボリドルフという。君の名前を教えてはくれないかな？」

「信頼に足る人物にしか名乗らないことにしている。」

「そうか。ならば会話を通して私を信頼してもらおうことにしよう。」

少女：シンボリドルフと言ったか。聞いたことのない名前だ。ただならぬ雰囲気を感じるが、詳細が掴めない。

「まず、私の身の上話をしても構わないかな？」

「好きにしろ。」

「私は今中央トレセン学園で生徒会長をしている。」

「ほう？」

今この少女は中央トレセンの生徒会長…と言ったか。つまり上手いこと取り入れればトレセンへと入る道筋も開けるかも知れない。そして彼女は言葉が続ける。

「私の目標はウマ娘が全て幸福になれる社会の実現でね、そのためならば私の身すらも捧げる覚悟だ。」

「そうか。」

おそらくだがこの少女は革命家で、扇動家で、ロマンチストだ。理想を語るその表情が、掲げている理想の形がORCAを立ち上げた当初のマクシミリアン・テルミドールにも似ている。だが、彼女は私とは違う。諦観者ではない。本気で実現できると信じ、そのためにできることを全てするような気概を感じる。だがそんな理想を語る姿はどうにも定型句臭い。というよりは彼女がよく使う前書きなのだろう。つまり本題が隠れている。

「余分な話は不要だ。本題に入れ。」

「おや、感づかれてしまったかな。三文芝居しかできないのは私の性質でね。許してくれ。」

そして彼女は向き直る。

「君の先程の走り、素晴らしかった。それでなんだが、君さえ良ければ

トレセンに入らないかな。」

そう彼女は手をこちらに伸ばす。握手を求めるとような手の形だ。今の私にとってこれを拒む理由はない。そして今この問答で判明した。彼女は信頼に足る人物である、と。

そして握手を求めたまま伸ばされている手を握る。こちらを見ているシンボリドルフの目を見据える。彼女の目は握りかえされたことに一瞬驚きを表したが、すぐに先ほどと同じような瞳へと戻った。そして私は手を握ったまま告げる。

「ステイシス、それが私の名だ。」

宿舍、親交

今私はトレセン敷地内の寮の一室に招かれている。何故こうなっているかというところ、シンボリルドルフと握手を交わした後に何故かはわからないが住居がないことを見破られ、同室は今遠征に行つていてしばらく帰つてこない予定だから、もしよければと言われたからだ。

既に入浴は済ませた。学生は入浴が早いようでルドルフ以外は全員もう入つていたらしい。そのため、誰にも見られることなく終えられた。着替えはルドルフのものを借りた。全体的にオーバーサイズだがかろうじて服としての機能は果たしている。

今いるのはルドルフの自室。美浦寮とか言う寮の三階奥だ。室内にはベッドが2つ、片方の枕元には無数の本が詰められた本棚がある。おそらくはこちらがルドルフのものだろう。そして、もう一つの方は特段何もないが、サイドテーブルに数枚のレコードが置いてある。それはクラシックのようで作曲者は全てエクトル・ベルリオズと書かれていた。

肝心の部屋主であるルドルフはというと今、私の入室許可を取るために申請に行っているようだ。出ていってからのかなりの時間が経過しているのでそろそろ戻ってくる頃合いだと思いが…。そう思いながらレコードを手に持つて眺めていると部屋の扉が開いた。

振り返ると、印鑑の押された書類を持ったルドルフが部屋に入ってきていた。

「すまないね、少し遅くなつてしまった。」

「いや、構いはしない。それにしても貴様、私をここに招いた方がいいが入学手続きなど今からできるものか？」

「ふふ、その辺りは私に任せてくれて構わない。」

ルドルフは得意げにそう言った直後、耳をピクリと動かしてこう続けた。

「多少“ズル”をすることにはなると思うが、ズルつと学園に入れるように手配しよう。」

ルドルフはキメ顔をしている。

沈黙。

その時間は10秒ほどだっただろうか。キメ顔の意図を掴みかねる。彼女ほどの聡明なウマ娘のことだから何か深い意味があるのだろうか、どうにもその意味を見いだせなかった。ルドルフを見つめて思案していると、

「…やはり繋がりが安直すぎたか。気にしないでくれ、なんでもない。」

彼女は少ししよげたような顔になってそう呟いた。

今のはあれか、ダジャレとかいうやつか。前に王大人あたりが考えてた気がするな。

笑うのが礼儀とかほざいていたが私は大して面白くもないものを笑う質ではない。別段笑う義理もないので気づいたが笑わないでおく。

「まあ、それらの手続きはまた後日としよう。今日はもう遅い。休むとしよう。」

「ああ、そうだな。」

そしてルドルフが電気を消そうと立ち上がったとき、扉が開いた。そこには4つのキャリアケースを手にしているウマ娘が立っていた。髪は夜のように黒く、瞳は血のように赤い。吸血鬼のような印象を覚える少女だ。

「夜分にすまん、ルドルフ。荷物がかさんだので減らしに来た。すぐに発つ。」

「ああ、構わないよ。」

そう言つて黒いウマ娘はケースをベッド脇に3つ置いた。そして今気づいたように私を見つめてきた。吟味するような、礼など捨て去った率直な目だ。

「何だ貴様。」

「ほう、この娘が例の…。今は時間がないのでね、自己紹介はまた後ほどとしよう。それでは、な。」

そう一方的に言つて彼女は部屋から出ていった。さながら嵐のようであった。それにしても彼女の雰囲気というのはどうにも見たこ

とがある。荘厳な武人然とした雰囲気、堅苦しい喋り方。そして相手を見る時の獲物を狙うような瞳。強さを求めるリンクスがよくあの目をしていたが、まさかな。

「いきなりすまなかつたね。彼女に代わって謝罪しておこう。」

「借りているのは私の方だ。部屋の主に文句を言うほど無礼ではない。」

「そうか。ならば今度こそ寝るとしよう。」

そして電気が消えた。おやすみ、という声が聞こえてくるが特に返事もせずにベッドに入る。ふわふわと柔らかいそれはなんとも温かく、次第に眠りの世界へと誘った。

夢を、見る。

深く昏い水の底へと引き込まれる夢だ。夢の私は恐怖に顔を歪めていた。次の瞬間、視点が変わった。周囲には見渡す限りの草原が広がっている。私はそこにただ一人立ち尽くしていた。後ろを見ると、すでに壊れ果てたステイシスがあった。海の色に侵食され、美しい青色は消え去っている。夢の私もそれに気づいたようで、よろよろとした足取りで近づき、それに触れた。そして光に包まれた。

また視点が切り替わる。光が晴れたその先には私が立っていた。ウマ娘となった今の私だ。ウマ娘の私は話しかけてくる。

「貴様は戦うのか。」

当然だ。ランク一位として譲るわけにはいかん。

「戦乱から逃れたのにか。」

だからこそだ。果たせなかった夢の残り火を燻らせるわけにはいかない。

「貴様の夢は叶わない。」

いいや、叶う。なぜならば私はランク一位だからだ。

「幻想だ。貴様はオーメルの庇護で一位になったに過ぎん。」

私を破ったものがいなかったことがその証左だ。

「…今一度問う。貴様は戦うのか。」

当然に決まっている。なぜならばオツツダルヴァ^スだからだ。

「フツ、ならばせいぜい足掻くといい。その道のりが無意味にならん

ようにな。」

貴様…。

そこで目を覚ます。寝汗が凄まじい。さながら昨日水たまりで目を覚ました時のようだ。目の前に心配そうに顔を覗き込むルドルフが見えた。

「…何をジロジロ見ている。」

「あ、ああすまない。少し苦しそうだったのでね。」

「問題ない。」

「そ、そうか？なら良いのだが…。」

体を起こし、服の裾で顔を拭う。汗はすでに引いたようだが全身が不快だ。

「すまないが、着替えをもう一着と、タオルをもらえるか。」

「ああ、構わないとも。」

そう言っつてルドルフは服を一着見繕い、タオルとともに手渡してきた。

「悪いな。」

来ていた服を脱ぎ、体を軽く拭いて新しい服に着替える。これでだいぶマシになった。カーテンが開けられているので外を見るとすでに日が出ている。

「今の時刻は？」

「6時だ。みんな朝練に出ているころだろうね。」

そう言っつてルドルフは立ち上がった。

「貴様も朝練か？」

「いや、私はお昼に食べるお弁当を作り、ね。」

「ふむ、ところで私はどうしたらいい？まだ入学していないものが学校を彷徨くのは不都合だろう。」

「そうだね。夕方までには各種手続きを終わらせる予定だからそれまでは部屋で待っていてはくれないかな。」

「なるほど、構わん。」

「迷惑をかけるね。」

ルドルフは苦笑をして部屋を出て行った。

さて、どうしたものか。ルドルフの本でも借りて読んでみるか。人
のものを許可なく漁る、というのはどうにも気がひけるが他にするこ
ともないし、漁られてやましいものがあるわけではなからう。

ひとまずはレースなんかがどういう形式で行われ、どういう種類が
あるのかを知ることから始めるか。

生徒会室の扉を開くとすでにエアグルーヴが中にいた。

「おや、用事でもあったかな。」

「いえ、ただ仕事がありましたので。今片付けた所でした。」

椅子に座り、書類に手をかける。エアグルーヴは私のそばに秘書の
ように控えている。

「ところでエアグルーヴ。」

「どうしましたか。」

「選抜レースはまだあったかな。」

「ええ、明後日に最後のレースがありますが…。」

「それは良かった。そこに1人追加で出走予定を出して欲しいんだ
が、仕事を頼んでもいいかな?」

「わかりました。構いません。」

というやりとりを経由してエアグルーヴは部屋から出て行った。
たづなさんに掛け合いに行ってくれるのだろう。さて、私は私で彼女
の入学手続きなんかを済ませておかなくてはな。幸いなことに彼女
の住民票はすでに受け取っている。それをベースとして特別推薦で
編入手続きを取れば入学できるだろう。

数枚の書類に推薦文を記入し、生徒会長の印を押す。秋川理事長で
あればこれを提出すれば受け入れてくれる筈だ。ふふ、彼女のターフ
での走りを見ることができるのが楽しみだ。

同胞、遭遇

夕方、今はルドルフとともに制服を買いに向かった帰り道だ。金は学園の理事長が全額負担してくれるらしい。私としては利益しかないが、こんなことに易々と金を使っているとそのうち破滅しかねないと思うのだが。まあ、貰えるものはありがたく受け取らせてもらおう。それにしても、ルドルフはうまくやったようだ。これも民草の彼女に対する信頼によるものなのだろうか。全く、素性不明な他人にここまで気を使うのは、いまいち納得できない。

ルドルフの方を見ると、赤い太陽に頬を照らされる彼女が映る。何度見ても端正な顔つきだ。レースなんかやらずモデルとして暮らせばいいのではないかと一瞬思うが、自分も人のことを言えんなど一笑に付した。学園へと続く川沿いを歩いていると、いきなりルドルフが駆け出した。

なんのことかと思いい見ていると、彼女は少し先にいる女性に話しかけた。その女性はウマ娘ではなかった。談笑している様子から先程本で読んだトレーナーというやつだろうか。どんな面をしているのかと気になって、彼女に追いつくようにしてそばに行く。

「おや、こちらの可愛いお嬢さんは誰かな。」

「それはこちらのセリフだ。貴様がルドルフのトレーナーか？」

「いや、私は彼女のトレーナーではない。」

正面から見たその女は非常に美しい顔をしていた。歳は食っていないそうだったが、それでもなお美人さを失っていない。それにしても、ルドルフのトレーナーでないならばこいつは一体何者なんだ。

「ふふ、彼女は私ではなく、シュープリス…昨日の夜君が出会ったウマ娘のトレーナーだよ。」

「…なんだと？」

待て、シュープリスだと？昨日のあいつ、シュープリスというのか？いや…まだ同名の人物の可能性もある。この世界のウマ娘は皆一様に変な名前をしているから断頭台という名前がいても何ら不思議ではない…。

「改めて、シユープリスのトレーナーのアンジェだ。君の名前を教えてください。」

アンジェ：いやまさかな…本当にまさかな…。私以前にも転移したリンクスがいるなどおかしいだろう。いや、おかしくはないのか？私という例がいるのだからおかしくはない…。だが、受け止めたくない。レイレナードの英雄たちが皆こぞってウマヤトレーナーになっっているなどと…。

困惑と思考を繰り返していると、ルドルフが目の前に手を翳してきた。

「いや、意識が飛んでいるわけではないぞ。」

「む、そうだったか。」

「それで、私の名前だったか。」

名前を語るのは信頼できる相手にのみ、リンクスならば当然だ。だが、この世界での私はリンクスではない。それに、名乗ったところで私を狙って刺客が差し向けられることもない…筈だ。この二日である程度分かったが、この世界では戦闘も、殺人も滅多に起こらない。殺人が起こったらニュースになるような世界だ。ならば名乗ったほうが便利ではある。

「私の名前は、ステイシスだ。」

「ステイシスか。良い名前だな。」

そういうと、アンジェは私の頭を撫でた。普段であれば愚弄するなと振り払う所だが、今の私には正常な判断力などない。目の前にいるのがレイレナードの烏殺し、その中身かもしれないという可能性が私に色々なものを想起させる。そして、もしそれが本当だったならば私は、どんな顔をしてシユープリス：いや、ベルリオーズやアンジェと顔を合わせれば良いのだ。

ウマ娘として接すれば良いのか？それとも、ウマ娘の世界に染まったであろう奴にリンクスとして接すれば良いのか？いや、冷静になつて考えると、あの連中がリンクスだった時代を忘れるとは到底思えない。普通にリンクスとして接すれば良いだろうな。落ち着きを取り戻して前を見ると、すでにアンジェはいなかった。

「どうしたんだ？沈黙考、先ほどから何かを考え込んでいるようだが。」

「いや、なんでもない。気にするな。」

その後の帰り道は何もなく、寮に着いた。そして、寮の門の前にてルドルフは私の方を向き直った。

「ああ、そういえば。君の部屋はもう手配してあるんだ。美浦寮のこの部屋だ。」

と、部屋番号が書かれたメモを手渡してきた。

「…同室はいるのか。」

「ああ、最近君と同時期に来た子がいてね。悪い子ではないから大丈夫だとは思いが…。」

「まあ、文句は言っていられん…か。いいだろう。それでは、な。世話になった。」

「うん、私も楽しかったよ。」

そう言っただけに寮へと向かう。ルドルフは学園の方へと向かっていった。何か仕事でもあるのだろうか。なるべく早く寮へと向かう。見られても問題はないが、普段着で校内を歩き回るのは推奨されんだろう。

寮の扉に手をかけ、部屋を見る。部屋の中はすでに電気がつけられており、窓の夕日を掻き消している。家具などは備付けのものしかない。そんな部屋に、自分の他にもう一人、ウマ娘がいた。

白い腰まである髪、寝ぼけ眼のような青い瞳、特徴的な長いアホ毛、白いワンピースを着た少女だ。それは私を一瞥すると、すぐに視線を保持している本へと移した。

「貴様、名前はなんと言う。」

「…ホワイトグリント。」

「貴様、まさか…！」

詰め寄り、顔を掴んで目を合わせさせる。

「貴様、ラインアークのホワイトグリント、か？」

「…ッ。」

そう言うと、彼女の目に一瞬光が宿った。やはり、ビンゴだ。雰囲気もあの傭兵に似ていると思った。

「私はステイシスだ。」

「そうか…。」

少し耳を動かしたが、気にしていないようだ。：存外に反応が薄いな。もう少し驚くかと思っていたのだが、彼女は再び本を読み始めている。なぜだ、これすら想定範囲内だとも言うのか？

「貴様、私がいることを疑問に思わないのか。」

「：旧知の人がいた。」

「何？」

旧知の人ということはつまり、リンクス戦争時代のリンクス、ということだろうか。こいつがラインアークから出たという話を聞いたことがないから、というだけの判断だがリンクスと出会っているならば私の登場に驚かないのも納得がいく。

だが、ベルリオーズは今遠征中でいないはず。ということはもう一人のリンクスも来ているということだろうか。

私というものでありながら聞くのが怖い。かと言って聞かずにいるのも…。と顔には出さずに悩んでいるとホワイトグリン트가口を開く。

「アートマン、そう名乗っていた。」

「アートマン…つまりサーダナということか？」

サーダナ、No. 2のオリジナルリンクス。かつてはバーラット部隊を率いて眼の前にいる奴を苦しめた、らしい。私はあくまでも口伝でしか聞いたことがないから詳細がわからない。

それにしても、そんなやつまでが来ているとはなんとも不可解な世界だ。

死したリンクスが流れ着く世界だったりするのだろうか。

そんな考察は無粋か。もしかするとリンクス以外にも流れ着いている可能性だって十二分以上にある。

「貴様は、これからどうする。」

「…全てはフィオナのために。」

「フィオナ・イエルネフェルトも来ているのか？」

「ああ。」

あの女までもが来ているのか。…なぜだ？リンクス以外にも来る可能性があるのか？法則性が一切見えない。もしかしたら完全にランダム選定なのか？

その後は二人共大して話すこともなく黙々と支度を進めた。奴も翌日からの編入となっていてらしく制服やその他諸々の準備をしていた。のだが、なんか用意してるものが変じゃないか？催涙スプレーに警棒、防犯ブザーにテーザー銃…。一体どこで仕入れてきたんだ。「おい、それ…どこで仕入れた？」

「フィオナが持つておけと買ってきた…女ならば持つておいて当然らしいが。」

「いや、女でもおかしいだろ。」

「そういうものか？」

見るからに驚いた表情をしている。いや、不思議に思わなかったのか。その後はいらなそうなものを適当に吟味してやった。かつて同盟を組んだ相手だ、流石に恥をかかせるわけにはいくまい。

私の用意はただ制服と先ほどルドルフに渡された大量の教科書を鞆に詰めるだけで終わった。

明日は、同年代の連中と初の顔合わせとなる。私と張り合うのにたるものか、楽しみである。

編入、畏怖

「本日は、編入生2人を紹介します。」

朝のホームルーム中にいきなり先生がそう言った。クラス中のウマ娘たちが沸き立つ。どんな子なんだろー、とか2人もいるんだーとかだ。かくいう私もすごく気になる。同期の黄金世代に匹敵する相手となるのか、それともただ策に使える駒に過ぎないのか。

「入ってきていいですよ。」

先生がそう言うのと前の扉が開いた。さあ、どんなものかお手並み拝見と行こう。

教壇に立ち、クラスを見渡す。一眼見た時の印象は、失望だった。どいつもこいつも間抜けな面をしている。編入生が珍しいからか、私と隣に立つホワイトグリントを交互に見ては憧憬や期待の眼差しを向けている。仮にも戦場へと向かう存在が皆一様にライバルとなるであろう相手にアイドルを見た時のような顔をするのは、はつきり言って気持ち悪い。たしかにレースでは命のやり取りはない、ないが、鎬を削りあう場なのだ。強者への憧憬と嫉妬を抱くことこそあれど、友のような目線を向けるとはなんともまあ腑抜けた連中だ。

だが、5人ほど、見込みのありそうな連中もいる。真新しいものを見る眼をしているが奥底に星のような光を宿す者。純然たる闘志を燃やした瞳を宿す者。冷静なようでありて獲物を吟味するような瞳の者。王者たる余裕を全身に纏う者。そしてこちらに興味が無いような素振りをしておきながらしつかりと力量を測る者。彼女らはいづい先日雑誌で見たウマ娘と一致する。

ということとは、この5人こそが黄金世代。期待の新人と評される連中だ。

良き戦士の雰囲気を感じ胸の高鳴りを抑えきれない。顔がにやけそう。私は戦いというものを楽しむ質ではなかったが、ウマ娘化のせいか好戦的になっていくかも知れない。

そういえば、隣のやつはどんな顔をしているだろうか。こうした表

情を向けられるのは慣れていないであろうから、さぞ狼狽えているだろうと思ひ横を見ると、意外にも堂々としていた。

「いやこいつただ上の空なだけだな。」

立つてから数秒経った時、教師と思しき存在が口を開く。

「では2人とも、自己紹介をしてください。」

どちらから行こうか。そう思つてチラ見すると、奴もこちらに目を向けていた。その目は先に言えと語っていた。

「フン…ステイシスだ。」

そうとだけ言う。挨拶など最小限で構わん。

「…ホワイトグリント。」

ホワイトグリントもまた私と同様に必要最小限だけのことを口にする。2人の自己紹介が終わつてから10秒ほど教室を沈黙が包む。教師は何をしているんだ。さつさと進行しないか。

「えっ、あ、終わり?」

「当然だ。それとも何か語らなくてはならんのか?」

「いや、そんなわけではないん…で、す、けど…。」

「ならばさつさと案内をしろ。時間の無駄だ。」

教師はバツが悪そうに私たちと生徒どもを交互に見ている。数回それを繰り返したのち、名簿に目を通す。

「えー、ではステイシスさんはスギノキューティーさんの隣に、ホワイトグリントさんはマックスジーンさんの隣をお願いします。」

案内され、教室の奥の方にいるウマ娘の隣の開いている席に座る。

「よ、新入り!アタシ、スギノキューティーって言うんだ。よろしくね。」

隣に座るウマ娘は豪快な笑みを浮かべてこちらに手を差し出してくる。

「…くだらん。」

一瞥だけをやり、そう吐き捨てる。相手は拒否されるとは思つていなかったらしく、鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしている。数秒後には理解が及んだようで、怒りを露わにした。

「なっ…!アンタねえ!」

「馴れ合いなど私には不要だ。」

目もくれずに一蹴する。言葉の通り、敵となりうる相手と馴れ合う必要はない。その相手がルドルフのような圧倒的な強者ならばわかるが、自身と同等の相手と馴れ合うのは損失しか生まない。怒りから立ち上がったいたウマ娘は私の言葉を聞いて離れていった。

その後は誰も私に話しかけることはなかった。皆一様に奇怪なものを見るように私を見ていた。傭兵以外の若者の集団に紛れるのは久々だったが、若者とはいつの時代も変わらぬものだ。異質なものは奇怪なものとして拒絶の対象となる。全くもつてくだらない。それでは強者から学ぶこともあるまいに。ホームルームが終わり、放課の鐘が鳴る。

寮に戻り翌日に控えるトレーナー選抜レースに備えるかと思つたときに気づいた。全員寮とは別の方向へと向かつている。特段今日は祭日というわけではないだろうが、なにをするんだ？おそらくはこの学園に通うものならばして当然の行動なのだろう。

その流れについていった先にあつたものは、芝とダートの2つに分かれる練習場だ。なるほど、この練習場で皆トレーニングをして本番に備える、ということか。そこでは、すでにジャージに着替えたウマ娘たちが走っている。流石に練習ともなれば皆真剣な顔をして走っている。こうした場で馴れ合うほどの腑抜けではないようだ。少し感心しながら見ていると、練習場にいた全員が湧き上がった。

なんの騒ぎだ、と皆が見る方に目を向けるとそこにはかの生徒会長、シンボリルドルフがいた。彼女も今からトレーニングのようじゃージに着替えている。彼女をじつと見つめていると彼女もこちらに気づいたようで軽く手を振った。そのモーションを目にした他のウマ娘は誰に向けて振ったかでガヤガヤと騒ぎになっている。生徒会長様が手を振ったのに反応しないのは流石に不躰かと思ひ、腰のあたりで小さく手を挙げる。それを見た会長はふふと笑つたように見えた。それにしても、彼女のそばにいる男は何者だろうか。手に持っているバインダーやルドルフに指示を出す様子などから察するにあれがトレーナーか。冴えた顔つきではないが、3年間を乗り切つ

たということはあるでも敏腕なのだろうな。

全員が練習の手を止めて彼女の一拳手一投足を見守っている。練習場には先程の活気はなく、談笑しているのなど当の会長とトレーナーだけだ。

軽い準備運動を終えた彼女は芝の上に降り立つ。彼女はしっかりと正面を見据えて両の足で地面を掴んでいる。

そして軽いフォームで走り出した。おそらく軽いアップのつもりなのだろう。だが、踏み込むたびに土が抉れていく。整ったフォーム、ブレない正中線。極限までの練習を積まなくては至れないと思わせるほどの走りだ。気がつけば息を飲んでその走りに釘付けになっていた。

まさしく風、その速度はアップというにはあまりにも速すぎ、究極だった。あれこそがウマ娘の頂点に立って全てのウマ娘を率いる存在だと、鮮烈に私の目に映った。

その後、寮に戻ってから何も手につかなかった。あの走りが脳内にこびりついている。速かった、圧倒的に。たしかに一昨日走った時の私も相当に速かったと思う。だがあれは格が違った。初めてネクストの速度に追いつけないまま撃破されていくノーマル乗りの気持ちを理解した。絶対的な力量差。幾多の研鑽をどれだけ積んでもたどり着くことのできない境地。その概念そのものを彼女は纏っているように見えた。そして何よりも恐ろしいのは、あの速度でまだアップだったということだ。つまり、私はただのアップを見て恐怖し、その場を離れてしまったということになる。他のウマ娘は怖くはないのか？あれほどまでに驚異的な存在、異次元の脚力を目の前にして、それでもまだ諦めずに走り続けることができるのか？少し、興味が湧いてきた。思い返せばここは勝手知らぬ戦場。いくら私が天才とは言え、何の情報もなしに戦えると思うほど傲慢ではない。カタログスペックでは語れぬ可能性というものはリンクス時代に幾度となく味わってきた。カタログスペックではない、体感でしか得られない情報を得るために関わるというのもアリではあるな。

そういえば、同室のホワイトグリントはまだ帰ってきていない。お

そらくはフィオナの元へと赴いているのだろう。寮の門限まではまだまだ時間があるから当然と言えば当然だ。することがないので、社会情勢を知るために購買で買った新聞を読む。

紙面の表紙には黄金世代が取り上げられている。つい半月前にデビューを果たした新進気鋭のウマ娘たちに期待が集まるのは当然だろうな。この目で見て分かったが、奴らは確かに可能性がある。だが…あれがルドルフに匹敵するかと言われると否と断言できる。あくまでも現状の評価ゆえに最終年になればどうなるかはわからないが、あそこまで極まった走りをするものは出ないだろう。

かといって、私たちリンクスが足りうるか、と言われればそれもまた否である。可能性がないわけではないが、あれに匹敵するかは微妙な所だ。ひとまず、トレーニングとやらがどこまで効果的なのか、来たる本番に向けてどれほど伸ばせるのが肝要となるな。

そんなことを考えているとホワイトグrintが帰ってきた。相変わらず死んだ魚のような目をしている。すでに風呂に入ったよう体から湯気が立ち、寝巻きに着替えている。特段会話も交わさずに交差する。私も今から風呂に入つてこようと思つたからだ。

タオルと寝巻き…といつても来た時に身につけていた服だが、それらをもつて共有の風呂へと歩く。明日を完全な状態で迎えるためにも早めに寝たい所だな。

出走、失望

芝の上を軽く駆ける。アップも兼ねて芝になれておくためだ。レースについての概略は先日読んだルドルフの雑誌にあったので把握済みだが、現場の情報は必須だ。事実、草がこんなにも長いとは思っていなかった。知っていなければ草に足を絡め取られて転倒するおそれもあった。一步一步、レースでの展開を思い浮かべながら走っている、気づいたら一周していた。軽く汗を拭い、ふうと一息つく。大体の距離感なんかもつかめたことだし、控室に戻って開始を待つ、か。

そして踵を返して部屋に戻る寸前、視界の端にターフの上で立ち止まってこちらを凝視する影が見えた。

美しい、彼女の走りは私にそう思わせるのに十分だった。外周を軽やかに走る蒼の少女は私を見惚れさせる。その足取りは妖精のようで、なびく髪から覗かせる横顔は女神のようで、気がつけば足が止まり彼女の目を目で追っていた。そして、彼女は一周をしたところで足を止めて額に流れる雫を拭った。その時の表情、吐息、動きの一つ一つが荘厳で、流麗で、美しかった。少しの汗で濡れた髪は彼女は水浴びを終えた直後の女神のようで目が離せない。呆けた表情のまま眺めていると、彼女は自分とは反対の方向へと歩き出す。ああ、行ってしまう。そんなことが脳をよぎったと同時に、彼女はなにかに気づいたように耳をピクリと動かして、こちらを一瞥し、そして向かってきた。

心の中を動揺が満たす。そして彼女は私に向き直って口を開いた。「何をジロジロと。自分のトレーニングを疎かにして鑑賞会とはいい身分だな？」

その口から放たれたのは、びっくりするくらいの皮肉だった。それを聞いて、また一層の動揺が頭の中を満たす。可愛らしい容姿からは想像もできないような、プライドのある声色。言葉の節々に見られる私に対しての悪感情。その瞬間私は悟った。あ、関わっちゃいけない

人だ、と。どうしよう、喧嘩売ってんのかとか言われるのかな。

えつと…えつと…と下を向いてキョドつているとこちらの顔を覗き込みながら彼女が再び口を開いた。

「まあいい、それで何の用だ？ 貴様の恨みを買った覚えはないが。」

「え、えと。あなたの走りが綺麗だなって思つて…。」

ゴニヨゴニヨと呟くように答える。それを聞いた彼女は何も言わずにこちらを見ている。

もしかして地雷踏んだ？ 綺麗とか言われたくない系の人が？ 兎にも角にも話題をそらさないと…。

「あつえと、今日の選抜レース、あなたも出るんですよね！」

「まあ、そうだな。」

「良いトレーナーに出会えるように一緒に頑張りましょうね！」

そう言うのと、いよいよ持つて静寂が場を包んだ。必死に作り出した笑顔が凍りつく。これも地雷？ ならどうしたらいいんだよ！ ちよつとイラついてきたよ！

そう思っていると、彼女が口を開く。

「貴様らはどいつもこいつも馴れ合うのが好きなんだな。畜生の性か？」

そう、一方的に言い放つて彼女は踵を返していく。振り向く直前の顔は、呆れと失望と皮肉が入り混じっていた。そして脳が理解をする前に彼女は私の視界から消えていた。

「は？」

理解したとき、そうとしか言えなかった。

出走の準備を整える。靴紐を解けぬように軍隊式で縛り、ゼツケンの確認を行い、用意されていた水色の短パンを身にまとう。一通りの準備が終わったらターフの上へと移る。

すでに何人かのウマ娘がその上で待機しており、落ち着かぬ様子で周囲を見渡したりしている。

その視線の先には数人のトレーナーらしき人物がいる。その全員は私達に大して期待はしていないようで携帯をいじったり走る前の

ウマ娘の写真を撮っている。

全くもつてくだらない。走る連中が走る連中なら、見る連中もということか。ひよっとしてこれが正常なのか？だとしたら腐敗もいところだろう。

パラッチのようなトレーナー群から目線を外してコースを見渡す。距離は1600m、マイルと呼ばれる距離だ。人間の体であれば長い距離だが、この体ならば大したこともない。レース開始まで残り数分、流石に他のウマ娘たちの表情にも緊張が見られる。

それらを尻目にゼッケンに書かれた番号のゲートの中へと入る。他のウマ娘たちも続々ゲートの中へと入ってくる。そして左隣を見ると、先程見た顔があった。

「あ、さっきの…。」

向こうも気づいたようで、こちらに顔を向けて小さくつぶやいた。その直後、彼女は下を向いたかと思うところらの顔面を再び見据えてきた。

「…なんだ？」

「あなたには、あなただけには負けません！友情を、くだらない馴れ合いだなんて呼ぶ人にだけは！」

その顔は怒気に満ちており、目尻には涙が浮かんでいる。よほど先程の発言を気にしていると見える。

「フツ、精々気張るといい。まあ、勝てるとは思えんがな。」

怒りとは燃料になる。闘志と決意を胸にしたこの娘であれば、あるいは。そう思い、期待をこめて言った。

それを聞いた彼女は再び唇を噛み締め、前を見据えた。

実況と思しき人物が話し始めるのが聞こえる。各人の名前などが紹介されていく。

全員の紹介が終わったとき、レース開始のカウントダウンが始まった。

足に力を入れ、走る構えを取る。そして、ゲートが開いた。

絶対に負けない。あんな、他人をバカにすることしか考えてない人

なんかに。そう思つて勢いよくゲートから飛び出した私は、瞬間的に絶望を叩きつけられた。

私のすぐ右のゲートから走り出した蒼は、同じタイミングで出たにも関わらず、私の戦法が逃げなのにも関わらず、100mを越えたあたりでもう大差がついたのだ。

彼女を除けば私が先頭。トップスピードで走っているから私と後ろの子たちの距離は結構離れている。だから後ろの子たちの表情は見えないけど…走る子たちの気配からすべてを察せる。みんな、絶望してるんだと。決して追いつけない。並ぶことすら許されない。そんな異次元の速度。

シンボリドルフさんの走りを初めて見たときのような、ああこの人は自分たちとは違う世界の人なんだという現実逃避に似た感情が胸を支配する。私の足が水に呑まれたかのように遅くなっていく。そして、トップスピードだったものは徒歩に等しい速度へと落ち込んだ。次第に歩くのすら億劫になった私は、他の子の邪魔にならないようにと少し外れた場所まで歩くと立ち止まった。そして、何も考えられなくなった頭にポツリポツリと弱音が浮かんでくる。

そりゃ、あれだけ強いんだから、馴れ合いなんていらんよ。私には、彼女に怒りを覚える資格すらなかったんだ…。

今までの私なりの積み重ね、レースでうまく行けなくて辞めちゃった子の思いも、友達と一緒に編み出したトレーニング法も、それら全てがふみにじられた。絶対的な強者、彼女はそれだ。絶望感とかの何もかもがようやく頭に追いついてきて涙があふれる。

そして、彼女がゴールした歓声にかき消されて、私はコースの隅で声を上げて泣いてしまった。

まったく…あの女は期待外れだったな。早々に離脱するとは。心が折れでもしたか？

それに他の連中もだめだな、未だにゴールしていない。フン…腑抜けどもめが。

「ステイシス、帰還する。」

大歓声に包まれる中、そうとだけ小さくつぶやいて控室へと戻った。

境界、交流

SOUND ONLY、そうとだけ画面に映る緊急会議が行われている。参加者はメルツエル、銀翁、ジュリアス、オールドキング、そしてこの私、ハリだ。議題は無論先日のラインアーク襲撃に置いて回収する手筈であったステイシスの消失についてだ。

「状況証拠的には、どう見てもメルツエルが黒いのお。」

銀翁：ネオニダスが口を開く。今は議論の中盤、皆の意見としてはメルツエルが团长という座を奪い、ORCAの支配権を握るために意図的にやった、というのが今のところ濃厚な線とされている。

「前々から知恵が回る参謀だとは思っていたが、まさか悪質な野心家だったとはな。」

ジュリアスが皮肉たらしく言い放つ。当のメルツエルは何も言わない。先ほどから弁明もせず押し黙ったままだ。

オールドキングは先ほどから議論を煽るような発言を時折するだけで特に何もしていない。私は例のごとくずっとミュートだ。

それにしても：かなり意外だった。まさかメルツエルともあろう者が、かのマクシミリアン・テルミドールの最も信頼する人物が裏切った事、そして何よりも、最初の5人が彼を庇うでもなく糾弾する側に立っている事だ。

皮肉や状況整理だけで一向に進まない議論を耳にしながらコーヒーを飲んでいると、ついにメルツエルが口を開いた。

「諸君、私に言いたいことはそれで全てだろうか。」

「まあ、そうなるな。」

「さて、皆に一つ頼みがある。」

メルツエルの癖だろうか、勿体ぶった発言が多い。それにしても、頼みと言ったか。一体どんな頼みが飛び出てくるのだろうか。自らの保身のために弁明をするか、はたまた有用さをアピールして除外を防ぐか。

「私を潰す前に、一つだけ仕事をさせて頂きたい。」
「ほう。」

「私がいなくなれば首輪を外す役割を担うものも、テルミドールに変わって声明を発表するものも居なくなる。それはこの現在でも勝算の少ないORCAにとって深刻な損失だと、私は認識している。それ故にカロードから1人、知恵の回るリンクスを引き抜こうと思っている。」

彼の頼みは、謝罪でも、弁明でも、アピールでもそれでもなかった。そこにあつたのは、純然たるORCAの理想を実現しようとする心意気だった。新参の私は判断に困る。というのも、完全にメルツエルが陰謀を働いたと思っっているからだ。

それを聞いた他の人は黙っている、と思いきやオールドキングが口を開いた。

「裏切り者を、見逃すと思うのかい。それに、それすらも策略なんじゃねえか？」

先ほどと同じような挑発するような発言だが、今回ののは的を射た指摘だ。正直、さすがにここまで怪しい人物をのうのうと自由にさせておくわけにはいかない、他の連中もおそらくそう思っっているはずだ。

だが、現実とは異なっていた。

「ふっ……ふっ……メルツエルらしい。芝居はもう結構だぞ。」

「全く、儂らがお前さんが裏切ると思うのかね？ 冗談が上手いぞ、メルツエル。数年ぶりに大爆笑してしまったわい。」

「ほう、私は本気だったのだがね。」

張り詰めた空気が一気に解ける。3人はすでに談笑ムードへと移っている。困惑しているのはおそらく、私とオールドキングくらいだろうか。

「さて、第一の議題はこの辺りで終わりにしようか。」

「ああ、そうだな。今最も重要なことは……」

「団長不在のORCAをどうするか、だな。」

最早そこに先程までの鬱屈な空気はなく、次をどうするかを見据えた革命家の意志を継いだ意見が交わされていた。まあ、主要な人々が良いと言うならそれで良い……のかな。

それにしても、テルミドールは本当にどこに行ってしまったんだろ

うか。ラインアークの水底にまだいるのだろうか。

「そういえば、同時に消えたホワイトグリンと及びフィオナ・イエルネフェルトの所在も気になるな。」

「ああ、そこもこれから説明させていかなくってはならんだろう。」

控え室の椅子に座り、未だ落ち着かない心臓を宥める。鏡に写る自分の顔はもとの白さ故に真っ赤に染まっている。ダラダラといまだに流れ続ける汗を服の裾で拭う。すると、上着の下に隠れていた肌に触れる空気が冷たく気持ちいいことに気がついた。

ここは私だけの控室。他の誰も侵入してくることはない。ならば、脱いでしまっても良くないか。そう頭に浮かんだ次の瞬間には私は服の裾に手をかけ、勢いよく捲った。上のジャージを脱ぎ、顔を出し、長い髪をジャージの首元から抜いたとき、ちょうど部屋に入ってきていた白いウマ娘と目が合った。

「なっ……！」

「あ。」

私ともあろうものがこいつの気配を察知できず、挙げ句このような醜態まで見られるとは。恥ずかしいことこの上ない。腕にジャージの上を残したまま密かに赤面していると、奴はさも当然かのように部屋に入ってきて控室の椅子に座り、置いてある菓子に手をつけ始めた。

「……いや、何をしているんだ。」

「む？ああ、着替え中だったのだろう。俺……私は気にせず続けてくれ。」

奴は心底不思議そうに答える。

「元男の貴様が仮にも女の裸体を見るのはどうなんだ。」

「フィオナは見ても何も言わないのだが……。」

「それはあの女が異常なだけだろう。」

まじかこいつら。前々からバカップルだとは思っていたがよもやこいまでとは。

そんなやり取りを交わしている間に私の体はクールダウンを終え、冷たい空気は気持ち良いものから少し寒いものへと変化した。

上のジャージを腕から外し、タオルで体を軽く拭いてから制服へと着替える。

「ところで貴様、なぜここに来たんだ？」

「ん…？」

ビスケツトを頬張りながらやつはこちらを向く。レース終わりの私の控室に理由もなく来るわけがない、と思つての質問なのだが…。

この質問を聞いた眼の前のやつは、少しの思考の後に思い出したかのように手を叩き、口の中の物を飲み込んでから喋りだした。

「そういえば、フィオナを紹介しようと思つて来たんだった。」

「はあ…？あの女をか？」

「ああ、フィオナが会いたいと言つてな。私が先行して見てくると言つて待たせているんだった。」

そう言うと、呆れる私を置いてやつは部屋から出ていった。なんでそんなことを忘れた？そしてなんでこのタイミングで言うんだ？ホワイトグリントの思考回路は前から理解しがたいが今回もいまいちわからん。

とりあえず、フィオナ・イエルネフェルトがここに来る、という事実だけはなんとか飲み込んで決心を固める。

少し待つと、再び扉が開く。そこにはウマ耳を生やした白髪ともう1人、金髪青眼の女がそこには立っていた。その女は前世で見た姿そのままであり、軽く30は行っていると思うが未だ顔は若々しい。

そして奴は引き締めた表情で一礼をする。その礼はいつかの会談で見たそれとそっくりそのままだった。そう、そっくりそのまま。奴と白いのが手を裏で繋いでいるところまで一緒である。

「貴様、そんな凜々しい表情したところで手を繋いでいるのは見えてるぞ。」

「見せつけていますので当然です。オツツダルヴァ。」

「…その名で呼ぶな。」

頭が痛くなる。なんなんだこのバカップルは。しかも2人ともす

まし顔でやっているのがなんとというか、腹が立つ。

「あの時は仕方なく手を結んだが貴様のアナトリアの件、それを許したわけではない。あまり馴れ馴れしくするなよ。」

「…そう、ですか。」

少し残念そうにフィオナは下を向く。だがすぐにいつもどおりの真顔を貼り付ける。

「そんな表情を浮かべるのだな。」

「…私にはわかりかねますね。」

「フン…そうか。」

今更許しを請える立場でないというのはお互いに分かっている。それ故に私達は戒めのように隔絶をし続けるのだ。歩み寄るのは簡単だ。だがそれでは奴らが救われてしまう。それではかつて失った同胞があまりにも報われん。それは奴らとしても不本意だろう。

「それで、何の用事だ。」

流石に用事もなく来るほどアホな女とは思っていないが、こちらの世界に来て私も、あのアホ毛も少し気が緩んでいる。こいつまで平和ボケになっていないか、私には関係のない相手ではあるが不安だ。

「今日のレース、拝見させていただきました。圧倒的でしたね。」

「まあな。正直拍子抜けしてしまった。」

「今度やるレースでは退屈はしませんよ。」

「…ん？何を言っているんだこいつは。文脈が何も続いているぞ。普通あのセリフには賞賛とか宣戦布告とかそういうものが続くだろう。いや待て、これが宣戦布告か？」

「紫菊賞に出てください。私のホワイトグリンも出ますので。もつとも中距離が苦手ならばそれで構いませんよ。」

「なるほどそういうことか…。いいだろう。特段目標を定めていたわけではないからな。そこで勝負と行こう。それと貴様、あまり馬鹿にするなよ。」

こいつと再び交える事ができるのならばそれを逃す手はない。前の世界では八百長をしたがこの世界では決して手は抜かない。吠え面をかかせてやる。

「要件はそれで全てか？」

「ええ。本当は貴方の顔が見て見たかっただけでしたけど。」

「何を言っているんだ貴様は。」

私の悪態を気にもとめないように2人して踵を返して部屋を出て行く。全く、嵐のような奴らだった。

さて、そろそろ私も部屋を出るか。借りている場所に長居するのはあまり好きではない。まとめられている荷物を手に取って部屋の扉を押す。少し歩いて、スタッフ用出入り口が目の前に現れる。

ドアノブに手をかけて捻ると、昼間の強い日が流れ込んでくると同時に無数の人が私を囲った。

群衆、選択

辺りを取り囲むのは、トレーナーの群れだ。その数、およそ20人近く。手にはバインダーを持ってわれわれよわれよと勧誘をしてくる。

勧誘法はさまざまだ。担当するチームの優秀さを語る人物、如何に格を上げられるかを語る人物、幸せにすると語る人物。

その根底は見え透いている。表面上取り繕ってはいるが、所詮金儲けがしたいだけなのだ。

「フン…くだらん」

そうとだけ切り捨てて、間を抜けていく。引き止める声や腕が伸びてくるが、ウマ娘の動体視力を以てすれば避けることなど容易だ。

そして群衆を抜ける直前、何者かの胸にぶつかった。女性の胸だ。

「おや、すまないね」

「その声は…」

聞き覚えのある声を耳にしたことで上を向くと、かの会長がそこに立っていた。周りにいる人間どもも気づいたようで、ヒソヒソと話している。

「何の用だ？」

「少し世間話でも、と思ったのだが…ふふ、場所を変えようか」

「ああ、そうだな」

そう言つて、歩き出そうとした自分の腕が掴まれる。次の瞬間、視界が加速する。ハツとして前を見ると、会長がこちらをチラと見た直後に前を見て駆け出したのだ。

そこからはよく覚えていない。流れる景色を視界の端に捉えながら全力で足を回すしか出来なかった。立ち止まった時、そこは学園の近く、一度訪れたことのある河原であった。

切れた息を辛うじて落ち着かせていると、ルドルフが口を開いた。

「ふふ、すまないね。だが、これだけ離れれば追っては来れないだろう」

「だからって…ゲホツ…ここまでする必要はないだろう…」

「おや、速度を出し過ぎてしまったな…すまない」

「フン…憐憫なら、かけてくれるな…」

私がそう言いながら汗を拭いルドルフを見ると、彼女は一瞬驚いたようだったが微笑みをたたえた。その後は土手に座り、軽い雑談をしながら時間を過ごした。これからのこと、学校生活について、そして今日の私のレースについて。

「君は今日の相手をどう思ったかな」

「…言葉を慎まないのなら、粗製と言うところか」
「そう、か」

何かを懐かしむかのように彼女は遠くを見つめる。そして立ち上がり、覆い被さるように私と向かい合う。

「天資英明、君の素質は私から見ても凄まじい」

「フン、皮肉としか思えんぞ」

「青天白日、本当さ。私、それどころかあのシュープリスすらも超えかねない。故に、一つ忠告だ」

彼女は前にかがみ、南中からズレた太陽を背に私に語りかける。彼女の長い髪が視界を狭め、彼女の顔のみを私に見せる。口が開き、言葉紡ぐ。

「あまり孤独を好まない方がいい」

「…?…いったいどうい…」

「さて、私は用事があるからこの辺りで退散するでしょう」

問いかけを遮るかのように腕時計を見て彼女は呟く。おい、と声をかけるが彼女は一人去ってしまった。時刻は正午から少し経った頃。彼女の忠告に首を傾げて、少しの空腹を感じながら学園への帰路を辿るのであった。

学園に着いた時、周囲から無数の視線が注がれていることに気がついた。今日のレースの結果でも学園に届いたのだろうか。数が多すぎて感情までは流石にわからんが、どうせ良いものではないだろう。エンターテインメントを度外視したかのような無慈悲なまでの圧勝、普段の他者と関わらない姿勢など反感を買うのには十分すぎる条件が揃っている。

あくまでも気づいていないフリをしながら空腹を満たすために食

堂へと歩みを進める。

食堂は昼時を過ぎていたことから空いている。外で感じた視線もなく、落ち着いて飯を食えそうだ。さて、何を頼んだものか。看板のメニュー表を見ると、どれもこれも美味そうな見た目をしている。ひとまず一番人気と書かれている、特製ニンジンハンバーグとやらを頼むか。

食券をカフェテリアの受付に渡し、引き換えに貰った呼び出し用のアラーム機を手に料理の完成を適当な席にて待つ。

窓際のカウンター席で、外を見る事ができる。屋外には楽しそうに談笑するウマ娘達が見える。

孤独を好むな…か。私も、あのウマ娘達のように協力しあえと、そういうことなのだろうか。だが、戦いというものは個人のもの。僚機として動くミッションもあるがそれだとしてもお互い自由に動く方が気楽で、良い動きができた。その環境を整える整備士がいるのはいいとしても、争い競う同僚など私には不要なのだ。

まして同期の相手はカラードで言うところの20番代後半。仮に私の今の実力がオーメルの才女程度だったとしてもその格は比にならない。一方的な蹂躪となるのが目に見えている。そんな相手とどう研鑽しろというのだ。だがしかし、あの皇帝の異様なまでの強さの根源がそれだとしたら…。

腕を組んで悩んでいると、テーブルの上に置いたアラームが震える。赤色のランプを点滅させてけたたましく喚くそれを手にして受け取り口に向かう。そして、アラームを手渡して出てきたものを見た時、絶句した。

あまりにも巨大な、ハンバーグだった。3kgはあるだろうか。そして、大胆にまる一本人参が刺さっていた。

いや…写真で見たときこんなサイズじゃなかったよな…刺さってる人参だって、4分の1くらいだったような…目の錯覚を疑って目を擦ってみるが相変わらずの存在感でそれは鎮座していた。

「失礼…サイズ間違ってます…」

「いや、注文通りさ。それとも、ドミナントサイズのほうがよかったか

ね？」

厨房に立つ若い青髪赤眼のウマ娘が答える。ドミナントサイズ：？もしやこれよりも大きいのがあるのか？ウマ娘という文明の底知れなさに内心恐怖しつつも仕方がないのでそれを持って先程の席に向かう。

来たときよりも人が減っており、今この食堂には私一人と遠くに見える人目を気にしながらスイーツを頬張る上品な芦毛のウマ娘くらいしかいない。

それにしても…この両手に乗るこれをどうしたものか。確かに美味そうではある。内側から溢れた肉汁がソースと混ざって光り輝いているし、シンプルな旨味の香りも空腹を誘発する。

だがあんまりにも量が…。元の私の姿でも到底食いきれない量だ。それよりも小柄な今の私の体では到底完食できないだろう。ひとまず食えるところまで食って、遠くのお嬢様に譲ってやろうか。重量物をテーブルの上に置き、フォークとナイフを取ってくる。そのそばに大量の白米の入った巨大な炊飯器と大量に積まれたバゲットがあり、上には無料、おかわり自由と書かれた看板が吊るされていた。量が増えるのはかなり厳しいものがあるが、ハンバーグ単品で食い切れるという気もしない。バゲットを2つ皿に載せて空いた手でフォークとナイフを持って席につく。

さて：どう攻略したものか…。

そう思いながら無心で食べ進んでいると、気がついときには目の前からあの巨体は消え失せていた。存外に入るものだな…。自らの胃袋に恐ろしさを抱きながら呆然としていると、隣に何者かが座った音がした。

「いや〜ウマ娘の食いっぷりってのはやっぱりいいね〜」

「何者だ？貴様」

そちらに目を向けると笑みを浮かべた男性が頬杖をついてこちらを向いていた。私の問いかけに対してそいつはそうそうと言ってポケットに手をつっこみ、名刺を取り出して差し出してきた。

「俺は新人トレーナーの金田っていうんだ。あんたをスカウトに来た

依頼、契約

「胡散臭いな、却下だ」

「え〜そうと言わず、ね?」

目の前の若い男は物乞いするかのように手を合わせる。あの群衆に紛れて勧誘しなかったズル賢さは認めるが、なんというか胡散臭い。そう、いうならば王小龍のような。

「ならば、依頼ってことで契約しない?」

「なんだと?」

耳をぴくりと動かして奴を見る。

「そう、これは俺から君への依頼。依頼内容は君のスカウト。どうか
な」

「報酬を提示しろ。見合うものならば受けてやる」

「おつ、乗り気だね。そうだなあ…俺の一生、どう?」

「今回の話は無かったことにさせてもらおう」

空の皿を持って席から離れる。

「わー待って待って! わかった! 望むもの! 望むものなんでもあげる
から!」

「ほう? 貴様、撤回はさせんぞ」

そう言つて男を睨むと、奴は自分の発言に気づいてアツと言う顔になつた。

トレーナー室の椅子に座り、目の前で正座する男を見下ろす。さて、報酬はどうしようか。金…はあまり要らん。身の回りの世話…も要らん…。トレーナーの役割といたらトレーニングだが…。目の前の男を見る。目はボサついた前髪で見えない。金髪だし、話しかけ方とかも含めてホストみたいだ。見える部分からはこいつが若いという事がわかる。おそろくだが、トレーニングの腕は大したことないだろう。

「はあ…」

「案内させられた上に正座させられて、挙げ句の果てにため息まで吐

かれちやった」

「つくづく使えないな、貴様」

「まだ何もしてないのにあの女王様と同じこと言ってくる…」

さて、いよいよどうしたものか。私の望むもの…ああ、良いものがあつた。これを叶えられぬというならばそれまでだ。ものは試しに言ってみるか。

「貴様、トレーナーだな？」

「そうですね」

「ならば私を、かの皇帝と同格まで上げてみる」

見るからに驚愕している。やはり無駄だったか。まあそれも無理はない…あの存在と同格にするのは到底不可能に近いと、私ですら思っているというのに。

「そんなんでいいの？」

「やはり無理だな、帰らせて…は？」

「大金払えとか言われたらどうしようかって思ってたから楽で助かったよ。それじゃ、よろしく」

正座を解いて足についた埃を払う目の前の男を見る。目の前のやつは握手を求めている。が、私はそれどころではない。想定外が過ぎた脳がロクに働いていない。なんでこの男はこんなにあっさり受けたのだ。

「不可能だと、思わんのか」

「実際あの皇帝様ができてるし、断頭台さんも同じくらい強いしね。なんとかなるでしょ！」

あまりにも根拠のない楽観的な意見に思わず吹き出してしまふ。変なツボに入ってしまった。抑えようとするが、どうにも収まらない。

話せるくらいまで落ち着いたため、目尻に浮かんだ涙を拭う。

「フツ…実に面白い。いかにもその通りだな…ククツ…」

「そんなに笑われるとちよつと恥ずかしいんだけど」

「いや…悪い…フフ…」

椅子から軽く飛び降り、握手のポーリングのまま放置された左手を

掴む。

「貴様に決めた。よろしく頼むぞ、トレーナー」

「ああ、よろしく…よろしくついでに名前で呼んでくれない？」

「貴様の実力が証明できたらな」

手を解き、改めて部屋を見ると、机と椅子が二脚ずつある。もしかして他のトレーナーと部屋を分けて使っているのか？それにしてもおそらくこいつのものであろう机はほぼ何も置かれていないのに対してもう片方はやけに豪華だな。真つ赤な薔薇の入った花瓶や細かい装飾の散りばめられた紫の杯が観賞用に置かれている。

「貴様、あの机は誰のだ？やけに悪趣味だが…」

「あくそれは俺が手伝わせてもらってる人の机だね」

「もしや先程言っていた女王様とやらか？」

「せいはい」

そう会話していると、外からヒールの音がコツコツと近づいてくるのが聞こえる。

「噂をすればってやつだね」

扉を開けたその人物は想像通りの派手な人物だった。黒に近い紫の髪に全体的に均整の整った美しい目鼻立ち、そして美しさを際立たせるナチュラルだが濃いメイク。一つ想定外を挙げるならば彼女の肉体である。トレーナーだというのにドレスをまとう彼女は腕や足を露出させているが、そのどれもが筋肉のついた細さだった。

それにしても、どう見ても外人だ。こんな人物まで居るとは。その人物は部屋に入ってきてこちらを見るや否や、軽蔑の視線を送ってきた。

「あら、野良犬が紛れ込んでるようね」

「ほう？私のことを言っているのか？」

「あなた以外にいないわよ。そんな汚い視線を向けないでちょうだい」

「フン…愛玩にしか役に立たない飼犬はよく吠えるな」

「へえ…」

一瞬で剣呑な雰囲気からトレーナー室を包み込む。私の傍にいる奴

は睨み合いの雰囲気を受けてオロオロしている。

「で、あなたは何をしているの?」

巻き込まれないために離れようとした男に向けて、逃さぬように女が不機嫌そうに話題を回す。

「この子のトレーナーにならせてもらいました!」

金田が姿勢を正してそう答えると、目の前の女は一瞬呆れた表情をしたが、その後こちらの頭の上から足の先までを見回してきた。

「汚い野良犬は嫌いだけど、無能が担当するには勿体ないわね」

「ならば担当してみるか?」

「死んでも嫌よ。いえ…流石にあの死に方の方が嫌ね」

互いに皮肉合戦を繰り返していくうちに、わずかな違和感が芽生えた。なぜかはわからないがこの女、どこことなくリンクスのように見える。いや、まさかな。

そう思った瞬間、トレーナー室の扉が開いた。

「すまん、メアリー。忘れ物をした」

それは、ウマ娘だった。濃い小豆色の髪に緑の目をした長身細身のウマ娘。丸い眼鏡を懸けたその人物は見るからに知的な雰囲気です立っていた。

「む…客人か」

その人物は私に気づいたようで、メアリーと呼ばれた人物と同様に私のことを見回してきた。

「ほう…それなりの素養はあるようだな、期待しておこう」

そう言うと、軽く私に笑いかけてから彼女のトレーナーの机の上にあつた荷物が雑多に入った籠を掴むとそそくさと出ていった。

「いまのは…」

「ああ、彼女? アートマンっていうウマ娘だよ」

「アートマン…?」

アートマン…アートマン…直近でその名前を聞いたような…。ああ、アナトリアの傭兵が言っていた転生してきた人物か。いや、まて、今のがオリジナルNo. 2のサーダナもといアートマンだ?! それに気づいた私は、アートマンが出ていった方を見つめて呆然としてし

まう。

「もしもくし…大丈夫？」

「あ、ああ…すまん。少し…いや、何でもない」

「そう？ならいいんだけどさ」

にしてもあれがアートマンか…。いかにも数学者といった雰囲気だった。戦争がなくなつたから数学と信仰に傾倒したのだろうか。

「彼女もすごいんだよなあ…三年生の四強の一人なんだよね」

「四強？」

「シンボリルドルフ、シユープリス、マルゼンスキー、アートマンの四人のことだよ。この人たちの中でも3000m以上では無敗、それが彼女さ」

「やはりベースが違うのだろうか」

「いいえ、私の育成が完璧だっただけよ」

肩にかけていたバッグをおろしていたメアリーが私達の間割つて入ってくる。そういえばこいつも一応トレーナーだったな。

メアリー…まさかこいつ…。

思考を始めた私を置いて自慢とおだてが始まった二人の間に今度私が割つて入る。

「貴様、少しいいか」

上機嫌で自慢をする女の話を遮つて尋ねる。

見るからに不機嫌になったそれを無視して言葉をつなげる。

「貴様のフルネーム、メアリーシユリーであつているか？」

「ええ、そうよ。でもあなたのような雑種とは会つた記憶がないのだから」

「ああ、私だつて会つたことはない。というより会いたくない」

はあ？という表情を浮かべた女は次の瞬間には合点がいったように手をぽんと叩いた。

「私を取り扱つた記事で知つたのね。私有名だし」

「違う」

そう切り捨てて、少し悩む。私の思考の後ろで喚く声が聞こえるがそれを無視して思案を深める。

こいつに、リンクスの話を持ち出して良いのだろうか。今はこんなに平和ボケした雰囲気だが仮にも元リンクス。傭兵に傭兵と打ち明けるのは日常での戦争の火種となりかねない。しかも相手は悪名高きBFFの女王様。

ふむ…だが…。

どうするかはもう決めた。思案を終えて口を開く。

暴露、伸長

「おいトレーナー」

「なんでございましょう…」

「席を外せ、この女と二人で話がしたい」

真剣な表情だというのを悟ったのか、不平を述べようとした女も何も言わずにこちらを見ている。にしても…私のトレーナーの方はこの一瞬のうちにやたらとやつれている。ちよつと面食らっているようだがこの場から逃げれるとあつては生き生きとし始めた。カフェテリアにいるから、と電子端末を片手に嬉々として部屋を出て行った。

「それで、話って何よ」

「単刀直入に聞くが、貴様リンクスだろうか？」

そう言うと、目の前のメアリーシエリーは一瞬だが顔を強張らせ、次の瞬間にはそういうことね、と吐き捨てるように言った。

「ええ、ご名答。私がBFFの女王、メアリーシエリーよ。それで、何をするつもりかしら」

そう言った女は顔は平静を装い、声色は単純な質問と見せかけているが、彼女の手は腰の方へと回されていた。おそらく、制圧用のレーザー銃でも持っているのだろう。

「そんなに警戒しないでくれ。ただ話がしたいだけだ」

「あらそう、でも私の記憶にステイシスなんて機体名はないわよ。貴方、どこの所属？」

「オーメルサイエンス、もつとも、元レイレナードだがな」

「レイレナード？」

私がレイレナードの名を出した瞬間、より一層怪訝な表情をされる。

それも無理はない。BFFにとってレイレナードは陣営の音頭をとっていた実質的なボス、そして裏切られた相手でもある。メアリーシエリーへの単騎出撃要請も、クイーンズランスの孤立も全て王小龍とレイレナードの差金によるものだった。BFFは実質レイレナー

ドが殺したようなものなのだ。

それに加えて、彼女の脳のメモリーに私の名前はおそらくないのだろう。それは彼女が他人に興味がないから、ではなく単に彼女が死亡したとき、私に機体がなかったからだ。さらに、オーメルサイエンスはリンクス戦争時代とはレイレナードと敵対していた企業だ。今の彼女の中での私の評価は、同盟相手の企業に所属していたと騙る嘘つき鞍替えリンクスと言ったところか。

彼女のいた時代背景を鑑みれば信じられないのも仕方のないことだ。あの戦局、如何なG Aとオーメルだとして巻き返せるはずもないと誰もがそう思っていた。最精鋭のリンクスが勢揃いなレイレナード陣営に対して、オーメル陣営のまともに動員できる戦力といえばA M S適正の低い伝説のレイヴンと実験的な趣の強いアスピナの最も新しく現れたリンクスの二名のみという、控えめに言っても目に見えた戦いだった。それを全て才能と経験で覆せるあいつらが異常なのだ。信じられないのもわかるが、信じてもらわねば困る。どうか証明する手段はないものか。

「フィオナ、失礼するぞ」

どうにか証明してやろうと思案をしていると、この場に来てはいけない人物ナンバーワンが扉を開けた。

「部屋を間違えたようだ。すまなかつたな」

扉を開けた彼、いや彼女はこの部屋がフィオナ・イエルネフェルトのトレーナー室でないことに気付くと、すぐさま扉を閉めて出ていくとする。おそらく、メアリー・シエリーはおろか、私にすら気づいていないのだろう

閉まる扉に、ライール特有の超速クイックブーストで割り込み、手を掴む。

「少し付き合え...！」

そして、ホワイトグリント、アナトリアの傭兵を室内に引きずり込んだ。部屋に転がり込んだそれを見たメアリー・シエリーは、雰囲気で察したのだろう、その目をまん丸にしている。

「あなた、あの時の野良犬じゃない」

「む、その声は…誰だ？」

「へえ、忘れるなんていい度胸ね。本当に、いい度胸だわ！」

彼女は堪忍袋の緒が一瞬ではじけ飛んだようで、背中で持っていたテーザー銃を何のためらいもなく発砲する。

しかし、音速近く飛来するそれは地面に突き刺さった。次の瞬間に聞こえるうめき声。そちらを見ると、銃を持つ腕を掴まれたメアリーシエリーと棒立ちながらしっかり関節を極めているホワイトグリントがいた。

アナトリアの傭兵は、弾を脊髄反射で回避したうえ、避けたことを気づかれる前にメアリーを制圧したというわけだ。いくらなんでも頭がおかしい。私より早いぞ、多分だが。

「放し、なさいよ、雑種の分際で…！」

「どこかで聞いたことがあるな、この声。ステイシス、知らないか」

「お前がやったオ리지ナルの一人、メアリーシエリーだ」

それを聞いた奴は数秒思索した後、ああ、と合点がいった声を上げた。

「そういえばそんなリンクスもいたな」

「あんたねえ…！」

無意識の煽りににらみを利かせるが、関節を極められていることで少しでも体を動かすと激痛が走るようで苦悶の表情を浮かべている。

「その辺にしておけ、そろそろ乱射されかねん」

「アンジェじやあるまいし、そんな品のない戦い方をするもんですか」

私の発言を聞いて思い出したかのように、手の拘束を外した。いきなりの拘束解除で変な態勢だったメアリーは地面にその身をたたきつけた。

「チツ、覚えておきなさいよ」

「？。ああ、わかった」

「この男にそういう言い方は通用しないぞ」

不満そうな雌猫を見下して会話する。

「まあ、私はアナトリアの傭兵と知り合い、ともすれば同世代のリンクスだ。信じたか？」

「ええ、はつきりとわかったわ、どうりでアナトリアの傭兵がこっちに
来ないわけよね」

悪態はついてはいるがさすがに人の上に立つもの、呑み込みは早い。
服についた埃を払いながら彼女は立ち上がる。すると、私を見ていた
時のように今度はホワイトグリンントを嘗め回すように見る。

「悔しいわね」

そう小さくつぶやいて、すぐにその視線を外したのを私は見逃さな
かった。もつとも、見られていたやつは見られていたことにすら気づ
かずに明後日の方向を向いている。

「もういいか?」

「ん?ああ、もう貴様への用は済んだ。去っていいぞ」

「ではな」

気が付いた時には白い閃光は部屋からいなくなっていた。残され
たのは私たち二人のみ。

「完全に忘れていたが、私が貴様にリンクスかと聞いた理由はだな」

「ネクストウマ娘関連の情報が欲しい、この世界のある程度の概要に
ついて聞きたい、といったところかしら」

「ご明察だ、ただ私も代償なしでもらえるとは」

「無料で上げるわよ」

「なんだと?」

提案しようとした私を遮って、最高の提案が示される。こちらから
報酬として提案できるものなんてなかったものだから、願ったりか
なったりだが、なぜ?

「あの男と同じ世代になるんでしよう?お前」

「ああ、そうだが」

「負かしてやりたいのよ。だから、協力してあげるわよ。感謝なさい」
彼女の表情は、あの時の戦場を見ているようだった。彼女の瞳の中
に雷を幻視する。彼女の死の間際を映したような情景が見えた。私
すらも焼き焦がしかねない雷を向けられるくらいなら、辞退すべき
だった。100万Cなんかよりもはるかに重い責任だ、下手を打った
らこいつに殺されかねない。少ししり込みするが、ここで怯んでは

オッツダルヴァの名折れである。

「フン、まあ任せておけ、何せ私は、ステイシス、オッツダルヴァだ」
「ただ、あれのスペックは正直とんでもないわ。ベルリオーズなんて目じゃないわよ」

「彼我の差はどれくらいだ？」

「そうね、ざっと二回りは格が違うわね」

「…なんだと？」

「もつとも、これはあくまで総合値。速度だけなら貴方のほうが勝っているわ」

速度だけなら、要はほかの性能が低いという話だろう。うすうす感づいてはいたさ。すべてのステータスがあいつは高い。前世の乗機の性能に左右されるなら、せつかくだったらアンサンングのほうがよかった。ステイシス自体が嫌いなわけではないんだが、アンサンングは私の全霊。ステイシスよりも慣れていたし、機体として純粋に強い。マクシミアン・テルミドールはあれを自らの半身のように動かしていた。

だが、今の私は何か違う。マクシミアン・テルミドールは私であるが、なぜか別の個人のように思えてしまう。革命への熱意も、愛機への情熱も、誰かの伝記を読んだような距離感である。

愛着込みであるのならは今頃泣いて悔やんでいるだろうに、今の私にはスペック的にそちらのほうが有利だな、という至極冷淡な感想しか出てこない。

「でもまあ、成長率がどうかはわからないわよ。貴方はまだ本格化なりたてみたいだし」

「本格化… ってなんだ」

「あら、あまりにも基礎的過ぎて誰も教えなかったのかしら」

「貴様はそういう口ぶりではないと死ぬのか？」

「まあ、教えてあげるわ。天才トレーナーとうたわれたこの私が、ね」

新報、異能

本格化、ウマ娘の肉体に急速に訪れるという成長期のことのようにだ。私の身長的に本格化前とみられたのだろう。だが、おそらくこの体は……。

「私の肉体はおそらくだが本格化を終えている」

「らしいわね……。希望が薄れたわ」

話しているうちに私の肉体についての理解が深まったわけだが、会話の流れで彼女も察したのだろう、私はもう生育終わっている。単に肉体が貧相なだけだ。

「まあ、いいわ。それで、あなたの異能は？」

「異能？」

「ええ、用語ではゾーンっていうんだっただかしたら。走ってる途中で起こる特殊能力というところかしら。あなたもあつたんでしょう？」

「いや、まったく」

「なら発動条件に合わなかった走り方だったのかしら。まあないことはないわよ」

「そうだといいが、な」

ゾーン、か。この前は一切の追隨を許さない最速を見せつけたわけだが、あれがゾーンなのか？ いやまさか。何かが発動した感覚はなかった。名前が付くほどのことなのだ、体感的にわかりやすく変化が起きるはずだ。

「あとはそうね、友情トレーニングについては知ってるかしら」

「……？ いや、なんだ？ それは」

「複数人でトレーニングをすると効果が上がる、と言われてるトレーニング法よ」

「スピリチュアルか？」

「まさか、ちゃんと効果があるのよ。だから友情トレーニングできる相手は探しておきなさい」

「何を言い出すと思ったら、そんなことか。くだらん」

「……馬鹿にしてもいいけど、そのうち後悔するわよ」

友情トレーニングだと？実にくだららない。そんななれ合いで強くなれるなら、この世界の勝負とはずいぶんとたやすいように見える。勝負の世界では常に一人、勝負の場では、全員敵だ。

内心、友情トレーニングというものへの嫌悪をあらわにしていると、部屋の扉がノックされる。呼びかけるその声は男性のもの、要は私のトレーナーだ。いigoと返事をするとおずおずと部屋に入ってくる。

「あのー、お話しの方うってもう終わりましたかね」

「ああ、ちょうどな」

「このあとはどうしようね、僕としてはトレーニングしてもいいんだけど、どうする？」

「ああ、頼む。時間を無駄にしている暇は私にはない」

「やる気満々だねえ。まあ今日は初めてだし軽くやろうか」

「さすがにそうだな。いかに機体が強力だろうと破壊してしまっても意味がない」

「んじやもう少ししたら女神像前で集合でおねがい。それじゃー！」

そう言つて、爆速で部屋を出ていった。メアリーの視線に耐え切れなかったようで、小言を言われるよりも早く出ていった。その危機回避能力だけは特筆に値する。流し目で彼女のほうを見ると、自慢話のフェーズに持ち込めなかったことが不満なのか、少し機嫌が悪そうだ。

あらぬ流れ弾を食らいたくはないので、私も部屋を出ようとドアノブに手をかける。

「これから待つのは、お前の思っているよりも数段厳しい戦場よ。心しておきなさい」

「老人の助言には感謝の意を示しておこう」

バタン、と扉が勢いよく閉まった。

三女神像前、今日はもう授業は放課らしく、すでにウマ娘たちが何人か集まっている。というか、あれからかれこれ30分近くさまよってしまった。なぜ私は知っている前提で返事をしたんだ。てつきりグラウンド方向にあるものだとばかり思いこんでいて、そちらを右往

左往する変質者になってしまった。通りがかった教員に恥を忍んで聞いてようやくわかって、今こうしているわけだ。女神像の前のベンチには、バインダーを手に持った私のトレーナーがいる。

「遅くなつたな」

「お、何かあつた?」

「いや、特に何も」

切れる息と流れる汗を何とか隠しながら受け答えをする。もとから持ち歩いてきたジャージを取りに戻って遅くなつたように見せかける。

「さて、今後のトレーニングメニューについての相談んだけど、こんなのでいいかな?」

そう言つて手渡してきたバインダーには文字が隅々まで書かれた紙がぎつと20枚ほど挟まれていた。軽く目を通してみると、体格に合わせたトレーニングメニューの一覧で、適正距離や脚質に応じた育成方針が記されており、最後のページには、何らかの分析をしたグラフや表の一覧などが載っていた。

「なんだ、これは」

「どこか不満でもあつた?」

「こんな量、いつの間に作つた...?」

「ああ、それは前に作つてたやつ。もし担当が持てた時のためにある程度のパターンを作っておいたんだ。それらを単に組み合わせただけだよ」

「ふむ...」

あらためてしっかりと目を通すと、とてつもないほどの研鑽と情報収集の粋ということがわかる。レースの予定や、最適なトレーニングメニューなど、私のあずかり知らない領域まで完璧にカバーしているのは正直脱帽だ。あんな風に馬鹿にしていたのが少し申し訳なくなる。

「そんなにまじまじと見られたら照れちゃう...」

「赤面するな気持ち悪い。だが、この資料は感嘆に値するな」

「え〜そう?俺なんてまだまだだよ」

「謙遜か?しすぎは嫌われるぞ」

「いやいやいや、会長のトレーナーさんなんて、一年近く休憩なしに彼女を怪我無く鍛えたって噂なんだから」

… この世界のトレーナーとやらはどうやら化け物ぞろいのようなのだ。一年、休みなくトレーニングをして故障のひとつもない？そんなの、ゲームの世界でもないと無理だろう。ただの陸上だとしてもそんなハードなトレーニングしたら一瞬で瓦解するぞ。ましてウマ娘の速度でそんなことをしたら…。考えるだけでも恐ろしい。さすがに嘘だろう。

そう思いながらめくっていると気が付いたらラストページにたどり着いていた。

一番気になるのはこれだ。先ほどは何らかのグラフがあるとしたらえられなかったが、よく見るとこれは、私のスペックの一覧のようだ。芝A、ダートC、逃げD、先行D、差しA、追い込みB等々何らかの適性のようなものが事細かに記されているが、いったいどこでこんな情報を手に入れたのか

「おい、貴様。この最後のページは何だ？」

「見ての通り、データ表だけだ？」

「そんなことを聞きたいのではない。どこから仕入れたのか、と聞いている」

「どこから？どこから…？」

そういうと、記憶を手繰るように長考を始めた。いやいやいや、自分で仕入れた情報だろう。なぜわからん。

「多分、三女神かな。なんかぼつと頭に浮かんできたんだよね」

「なんだと？そんな情報が信頼に足るものか」

「結構いるんだよ？ウマ娘の性能がなぜか手に取るようにわかるトレーナー。まあ、僕はまだまだだけど」

「… 変人集団」

言葉を失ってしまった。偏執的というか、もう狂気に魅入られた集団だろう。そのスピリチュアルがまかり通るなんてありえないはずがない。しかしこの世界ではこれが一般。もう私ではついていけない気がしてきた。

レースという競技を甘く見ていたのは私だったのかもしれない。だが、あくまでもやばいのはトレーナーだろう。ウマ娘本体の性能はこの前の選抜レースであらかた理解したが、やはり低い。それがトレーナーの裁量でいくらでも上がるという話なんだろう。

基礎スペックの差が歴然な以上そう焦ることもない、か。

「まあいい。今のところはこの方針で問題ない。さあ、今日のトレーニングを始めるぞ」

「おっけー。それじゃ今日は、スタミナトレーニングにしよう！」

水没、水没

「スタミナのトレーニングに、水泳か」

微妙な顔してつぶやく。

「君たちウマ娘にはこれが効率いいらしいからねえ」

「フ、フン。らしいで語るとは信用ならんな」

「いやいや、会長も水泳をしてスタミナつけてたし、确实だつて！」

トレーナーはプールサイドのさらに上、観客席のような位置から応答する。ほかのウマ娘もトレーナーもおおらず、二人きりだ。かくいう私は、プールサイドで水とかれこれ5分ほどにらめっこしている。

「あの一、そろそろ始めない？」

あまりにも長いこと入らなかつたことでしびれを切らしただろうトレーナーが催促してくる。

「あ、ああ。そうだな」

大きく深呼吸をして水に片足を付け、徐々にその身を浮力に任せていく。右足のほうも水に沈め終えてから、水中に飛びおりた。

そして気が付いた。まずい、浮上できない。

ステイシスの散り際が概念として張り付いているのだろう、嫌な予感のとおり、泳げない。手をしゃにむに動かすが、水面がバチバチとたたかれるだけで浮かんでいけない。

「ステイシスちゃん?!」

トレーナーの絶叫が水によって歪められて耳に届く。

意識が

、遠のいていく

メインブースターが、いかれただと…

次に目を覚ました時、私は医務室の天井らしきものを見上げていた。水着のまま横たえられたらしく、背中がびつしより濡れている。また、水が鼻に入ったとき特有のツンとした感覚が不快だ。

「目を覚ましましたか？」

「…何者だ」

頭痛を抑えながら上体を起こして、カーテンを越えてきたものの姿

を見る。

「スペシャルウィーク…か」

「はいっ！スペシャルウィークです、って自己紹介したことありましたっけ？」

カーテンを開けて入ってきたのは、黄金世代五人の中の一人、前髪だけが白いウマ娘、スペシャルウィークだ。彼女は、人差し指を額に当て、思案しているのかどうかよくわからない顔で静止している。

「救出は、貴様がしてくれたのか？」

「スタミナのトレーニングをしようと思っただけで、はいつたらおぼれてたみたいなので、つい…」

「それは… 申し訳ないことをしたな。だが、なぜ助けた？敵となる可能性のあるものは消しておくのが効率的だろう。それに、貴様のトレーニングを放棄してまで、なぜ」

それを聞いた少女は、きよとん、とした顔をしている。理解ができないような顔だ。顎に手を当て、見るからに考えている顔をしている。

「なにがそんなに不思議なんだ」

「私には、敵ってというのがよくわからないです。だって私たちは同級生で、女の子同士で、仲良くお喋りするのが、楽しいじゃないですか。そんな相手に絶対に手を抜かないでレースすることが、楽しくて、すっきりして、勝ち負けを超えた良さが、あると思うんです。って、よく言葉にできないんですけど…」

そう語る彼女の目は、煌めいていた。秘めた情熱を、偉大な目標をかなえるための正々堂々、正面からぶつかりに行く覚悟をその身に宿した少女は私の前に、圧倒的な存在感をもって立っていた。空に煌めく星のように、晴れのレース場に吹く濃密な風のような勢いをもってその言葉は私に迫りくる。

最後に放たれた照れ隠しで、ようやく彼女の気に？まれていたことを知覚した。

「くだらん、と切り捨てるには尚早だったのかもしれない…」

「黄金世代のみんなとはもちろん、ステイシスさんや、ホワイトグリーン

トさんともぶつかりたいです！」

割り込むように私が放ったつぶやきは耳に届かなかったのか、彼女は宣戦布告のようなものを放っている。

やる気に満ちた目だ。私のような人間にはまぶしすぎる。彼女の前に立つと、私の水底に沈んでいた精神が引き上げられるような感覚を味わってしまう。だがしかし、それと同時に私のプライドがそれを許さない。

リンクスの頂点に君臨した自負が、私を水底のさらに深い所へと導いてくる。

「フン… まあ、貴様らとぶつかる日を楽しみにしておこう。だが、それまでは関りは絶たせてもらう。うけた恩は忘れないが、それとこれとは別だ」

「はい！楽しみましょう！」

彼女は笑顔でそういった直後、不意に時計のほうを見た。そして、あっ！という声をあげた。

「ごめんなさい、トレーニングの約束があるので、私はここで失礼します！安静にしてくださいね」

彼女は一礼をしてとてつもない速度で医務室から出ていった。そして、入れ違いになるように金髪の男が入ってきた。

「… 恥をさらしたな」

「いやーまさかステイシスちゃんがカナツチだったとはね」

「笑いたければ笑え。私には何も言う権利はない」

「まさか、ウマ娘に得意不得意はいくらでもあるんだ、この程度で笑わないよ」

椅子に座ったトレーナーはどことなく窓のほうを見つめている。

「さて、これからどうしよつか」

「… 随分とあっさりしているな。慰めてくれないのか？」

「ステイシスちゃんはそういうのよりもっと効率よくしたほうがいいでしょ？」

「フン、なるほど。少しだが、見直した」

「それじゃあそろそろ名前を…」

「それは無理だ」

「このような談笑を挟んでいるうちに体のけだるさはいつの間にか消え、普通に立ち上がっても問題ない程度には回復した。よっ、と勢いをつけてベッドから飛び降りる。

「さあ、二回戦といこう。時間がもったいない」

「いやさすがにダメだよ?」

「貴様先ほどの発言と矛盾があるぞ」

「効率をよくするためにはいったん安静だよ、ウマ娘の体は人間と違って回復に時間がかかるのは君自身が一番よく知っているだろう?」

「ま、まあそうだな」

「知らないが。私はウマ娘になってまだ一週間くらいしか経っていない新参者だぞ。だがそんなことを言ってしまうえば白い目で見られるのは必至、なんとかごまかす。

「といっても何もしない、っていうのもなんだし座学でもしようか」

「レース学ということか?なるほど、戦略は何にも勝るものだ。ありがたく頂戴しよう」

移動して更衣室。さすがに医務室で着替えるわけにもいかず、また着替えを持ってきてくれる友もいないので着替えの置いてある更衣室に舞い戻ってきたわけだ。

スポーツドリンクを片手に更衣室に入ると、そこには白い髪に青目のウマ娘、とそれにまとわりつく金髪女の二人がいた。まあ要はいつも通りのホワイトグリンとファイオナイエルネフェルトのだが、ここからが異常だ。ホワイトグリンのほう、着替えの途中ではないか。肌着を無感情にパージしようとしているのをとんでもない顔でファイオナがいろいろな方向から見ている。頭がおかしい。

幸いこちらには気づいていないようなので無神経痴女と変態にからまれることはないことに安堵しつつさっさと出たい一心で爆速での着替えを行う。が、見つかった。

すでに学園指定の水着に着替えたホワイトグリンが私のそばへと来ていた。

「ステイシス、今帰りか?」

「あ、ああ」

「そうか」

まったく、ここ二人はどうあがいても会話が発展しないな。というかこいつもそんなくだらないことを話しかけるくらいならフィオナイエルネフェルトの相手をしてやればいいものを。

「ステイシス、このあとはどうするんだ」

「座学をやる」

「そうか」

またもや単調な応答で終わった。なんだこいつは。お前の犬だろうとフィオナイエルネフェルトを見るが、あいつはしやがんで何かをしているようだった。

「ステイシス、」

「やかましい！何回呼べば住むんだ貴様！」

さすがにしつこいので少し語気を荒げると言葉がとまった。その表情も、目の色も一寸も動かない。さながら、本物のネクストだ。いや、ネクストよりも機械らしい。

だが、変化が生じたものがあつた。アホ毛だ。先ほどまである程度の強さを持っていたそれは、どんなメカニズムなのか、水にぬらしたティッシュのようにしおれた。

私がそれに気づき、なんだこれはといぶかしむと、今度はフィオナのほうをアホ毛が指し、バツ印を作った。

構われすぎてさすがにしつこいと思つたのだろうか。

そしてホワイトグリントはずっと私の目を凝視している。

…なるほど、あの女を観客席に連行しろということか。面倒だが、まあその程度はやってやるか。

にしても、アホ毛は口よりもものをいうものなのだな。